巻　頭　言

25㎞の用水路

公益財団法人 日本植物調節剤研究協会　評議員
三井化学アグロ株式会社　代表取締役社長
小澤　敏

この数年，「数十年に一度」「百年に一度」，という表現を何回も聞いた。「災」がその年の漢字に選ばれた 2018 年，昨年とこの 2 年はその頻度が高かったように思う。「数十年に一度」だから，今後数十年来ないというわけではなく，過去の統計上から判断した言葉であり，対策や避難を誘導するために必要だとは思うが，頻繁に使用されてその言葉に慣れてしまうことが恐ろしい。

特に昨年は，九州豪雨，台風 15 号，19 号，21 号の影響による豪雨と甚大な被害を受けた災害が続いた。亡くなられた方もあり，多くの方が被災し，農業関連の被害も 3,000 億円を超えるという。ここに，亡くなられた方のご冥福をお祈り申し上げます。また被災された方々にお見舞い申し上げるとともに，一日も早い復旧を祈念いたします。

昨年の災害とは全く規模の違う話ではあるが，東京都三鷹市の井の頭池に源を発し，隅田川に合流するまで約 25km の神田川。もともとは江戸市中の飲料水確保のために普請された川である。神田川流域は東京の中でも比較的早い時期から市街化が進み，昭和 20 ～ 30 年代に中・上流部の開発が進むのにあわせて流域内の市街地は急激に拡大した。このため，雨水の貯留・浸透機能が低下し，大雨が降ると流域から一挙に大量の水が河川や下水道に流入し，水害が頻発していた。40 年ほど前までは不名誉ではあるが，洪水で有名であった。下落合にある父の実家は，この川から 30 mほどに位置し，洪水時には後片付けの手伝いに出かけていた。　当時，生活排水が流れ込んでいた川は泡立ち，周辺はまだ水洗式トイレも整備されておらず，洪水後は消毒のための石灰や，床上浸水した際は毛布などを近くの公民館にもらいに行ったことが学生時代の記憶にある。国土交通省の総合的な水害対策の対象として整備が進められ，今では洪水になったと聞かなくなったように思う。また水質も向上し，鮎も毎年確認されていると聞く。

昨年 12 月，アフガニスタンからの訃報，ペシャワール会中村医師が襲撃され亡くなられたというニュースがあった。その翌日であったか，深夜に中村医師が用水路を現地の人と作っている様子のドキュメンタリーをたまたま見た。その用水路の長さがくしくも神田川とほぼ同じ約 25㎞。

そのドキュメンタリーから引用させていただくと，アフガニスタンでは 2000 年以降の大干ばつと内戦で多くの人が犠牲になった。衛生状態が悪いことで感染症がまん延して村々が消滅するなど悲惨な状況も続いた。当初，医療支援だけを行っていたペシャワール会は「とにかく清潔な水が必要だ」と判断，約 1600 本もの井戸を掘った。だが，地下水が枯渇したほか，干ばつと洪水を繰り返す異常気象のために安定した水の調達はできなかった。

そうした中，帰国していた中村医師は，ふるさとである福岡県で山田堰を偶然目にした。「壊れなくてメンテナンスしやすく，渇水にも洪水にも強い山田堰に勝るものはない。限られた機材で，アフガニスタン人にも築造・維持ができる」と，2003 年に着工，中村医師自ら重機を操り，7 年がかりで全長約 25 キロの灌漑用水路を完成させた。

干ばつにあえいだ砂漠が緑地に変わり，16,500 ヘクタールの農地になる。ふるさとを離れていた人たちが次々と戻り始め，大地の恵みが育まれていく。

広大な農地に変わる基となった治水工事。強い意志と終身の計をもってなされたこの偉業のドキュメンタリーを深夜に涙腺を緩ませながら見入っていた。

農薬の世界に転じてきた最初の率直な感想は，「リターンに結びつくまで時間がかかるな」であった。

効率を上げることが大切ではあるが，時間軸が違う。これは「三樹の教え」だなと頭を切り替えた。一年の計は穀を樹うるに如くはなく，十年の計は木を樹うるに如くはなく，終身の計は人を樹うるに如くはなし。ここは十年の計だと。

本誌第 53 巻第 9 号で紹介させていただいた，新規作用機構を持つ新薬剤も長年の努力と，植調協会で実施していただいた評価試験のお陰をもってようやく登録することができた。災害だけでなく多くの課題がある日本の農業ではあるが，水に畏敬の念を持ち，我々は我々のなすべきことを十年の計，終身の計をもって愚直に行うことにより，日本の農業に貢献していきたい。